活動報告④ 東日本大震災　黒い津波の襲来

宮城県 名取市消防団
分団長
樋口（ひぐち） 惠一（けいいち）

ただいま、ご紹介をいただきました宮城県名取市消防団 閖上（ゆりあげ）分団 分団長をさせていただいております樋口惠一です。名取市を代表しての報告と伺い、生かされた者の使命かと考え、この場に参りました。

私たち、海岸線を居住地にしている人は、復興して元のような暮らしがしたいと願うも、なかなか先が見えず、街づくりを進めてよいものかどうか、それとも、故郷に住めなくなるのか、住みたくないのか、…と毎日気持ちが揺らいでおります。

今日は、新しい沿岸地域をつくり上げ、後世に残すべく、皆様とともに考えていただきたい思いでお引き受けした次第です。

我が故郷、名取市は仙台市の南隣りに位置し、仙台空港の所在する市であります。その中において、閖上地区は太平洋に面し、人口 7103 名、2551 世帯の漁業、農業を中心とした小さな街です。この街が東日本大震災の津波により未曽有の被害を受けました。閖上地区内で死者、行方不明合わせて 845 名という大災害でした。残念なことに、私の大切な家族母、妻、そして親戚の方々と多数の尊い命が奪われました。これからの復興の道のりは長く険しいものではあるかと思いますが、亡くなった人たちの無念を忘れることなく、しっかり歩んでゆきたいと思っております。

この写真は閖上のシンボルでもあります、閖上の日和山です。昔、漁に出る時、日和を見たと言われております。標高 6 m の人造の山です。犠牲者を追悼し、復興に願いを掛け、黙祷している写真です。

まず、初めに津波襲来の映像をご覧いただきたい

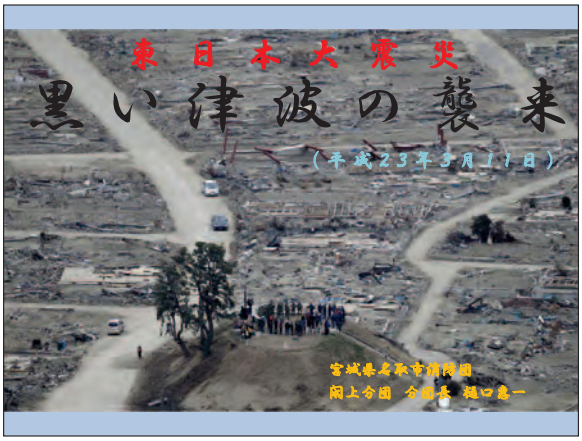


図 01

図 02

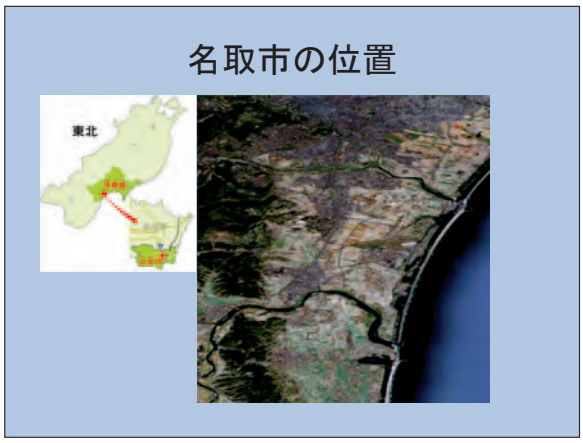


図 03

図 05

図 04

図 06

と思います（図 02）。

名取川を挟み、北側に仙台平野、藤塚地区、南に面して閖上地区、となります。名取川を遡上した黒い津波が、田畑を呑み、家屋や車を押し流す。「まさか、あの家に人が…」未曽有の破壊力、恐怖の 1 コマです。ご覧のとおり、未曽有の大災害でした。ちなみに、この映像は東北の人たちにとって大規模な停電により、当日見ることはできませんでした。

名取市の紹介を少々させていただきます。

東北の中心都市、仙台市のすぐ南に位置し、仙台空港を有する人口 7 万人の街です（図 03）。国道 4 号線、仙台東部道路が市を縦断し、物流の中核地としても発展しております（図 04）。平成 19 年 3 月には、仙台空港アクセス鉄道が開通、仙台市のベッドタウンとして新興団地が形成され、確実に人口が増加しております。

名取市の位置、名取市はこのような位置にあります。写真で見える川は、上が名取川、下が阿武隈川であり、ともに 1 級河川であります。

東北の空の玄関口、仙台空港とアクセス鉄道です。この画像は山手より仙台空港を撮影した航空写真です。緑が仙台アクセス鉄道。黄色と青で囲まれているところが、新市街地です。右上に見える細長い部分が、仙台空港の 3000m 滑走路です。後ほどの写真にありますが、空港ビルまで津波が押し寄せてまいりました。

杜せきのした新市街地（図 05）。左側が、空港アクセス鉄道、杜せきのした駅に直結する大規模なショッピングモールが右側に見えます。

こちらも、美田園駅周辺に造成されている美田園団地です（図 06）。この場所に仮設住宅約 250 世帯の方々が生活しております。

私が住んでいる、港町閖上です。閖上という文字、読めますでしょうか？ 871 年、十一面観音像が波で浜にゆりあげられたのを漁師が見つけた。以来、この浜を「ゆりあげ浜」と呼んだと言われております。また、仙台藩主が大年寺山参拝の折り、遠くはるか東に見える波打つ浜を見て「あれは何という所か？」

図 07

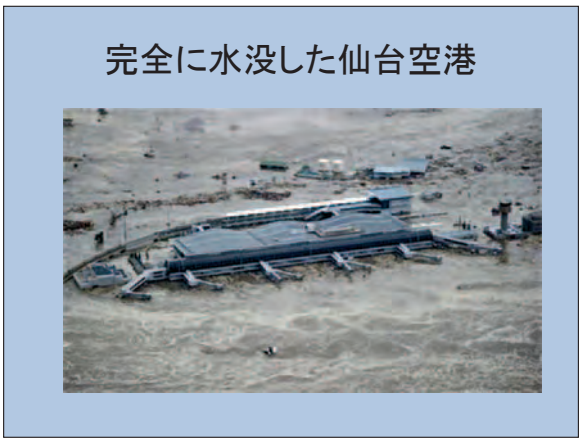


図 09

図 08

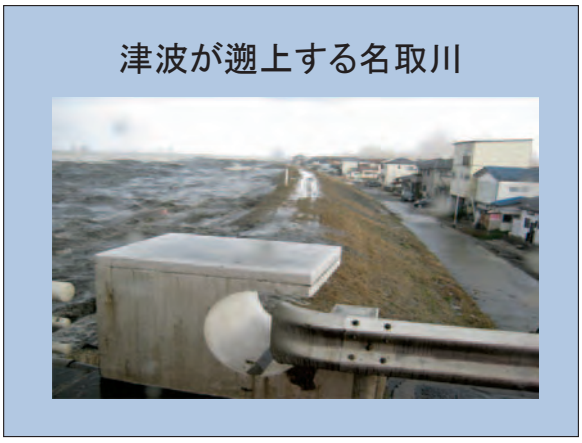


図 10

と家来に尋ねたら、「ゆりあげ浜と申します」と答えたところ、「文字はどう書くのか？」と尋ねられ、「文字はありません」と答えると、藩主は、「門の内側より水が見えたので、これからは門の中に水を書いて、『閖上』と呼ぶように」と言われました。それから閖上の文字ができたと、言い伝えられております。

そして、これらが、私の住んでいる港町、閖上が誇れるものです（図 07）。日本一の赤貝を販売している、ゆりあげ港朝市。夏になると多くの海水浴客で賑わう、ゆりあげビーチ。夏祭り花火大会、漁船パレード等、多くの観光客の人々で賑わう街です。

この決定的瞬間の写真は、３月 11 日忘れもしない巨大地震の後の大津波です（図 08）。仙台空港から太平洋に向かって撮影されたものです。

ご覧のとおり、仙台空港ビルも完全に 1 階部分が水没いたしました（図 09）。写真では、ターミナルビルの下に滑走路があるはずですが、濁流で全く見えません。この時、約 1000 人の方々がこの施設に

図 11

避難いたしました。幸い、着陸中の旅客機はありませんでした。

こちらは名取川河口の閖上大橋に救助に駆けつけた救助隊が撮影した写真です（図 10）。川の堤防から遡上した津波が閖上の町へ溢れ出すところです。

図 12

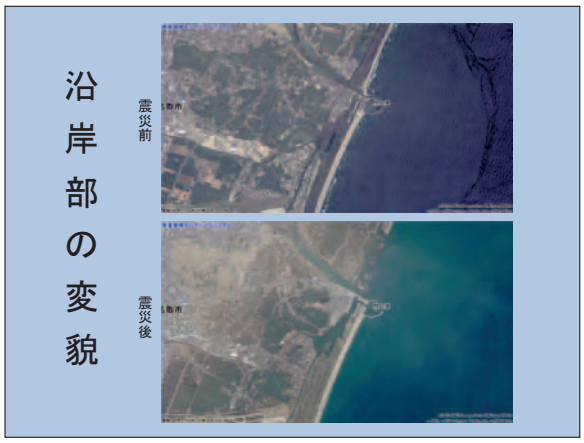


図 14

図 13

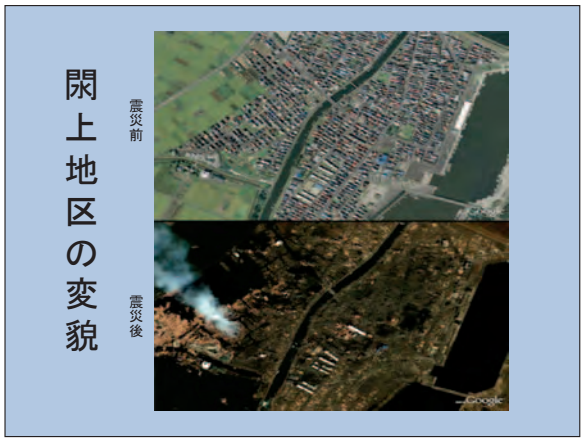


図 15

閖上の街を呑み込み、瓦礫と化した家屋を内陸の方へ押し流している状況です（図 11）。煙が見えるのは、津波で衝突したガスボンベや危険物が引火し、火災となったまま流れていく状態です。

こちらは、発災から約 2 日間、燃え尽きるまで消しに行くことすらできなかった閖上 7 丁目の集落です。11 日の夜、救助を求める 119 番が鳴り続けたと聞いております。残念ながら皆さん亡くなりました。

名取市の被災状況です。発災直後震度 6 強。３月 11 日 14 時 46 分、マグニチュード 9.0。津波の襲来、15 時 48 分頃。冠水の面積、27km^2、市域の 4 分の 1 以上です。最大余震、震度 6 弱、4 月 7 日 23 時 32 分。

津波の到達範囲（図 13）。津波は、およそ 4 km の内陸まで押し寄せ、閖上地区からは矢印で示したとおり、約 3 km の東部道路で、ある程度さえぎられました。多数の瓦礫が防波堤となった仙台東部道路の法面に吹きだまりました。青いラインが、最終的に津波が到達した範囲です。

こちらは、名取市沿岸の人工衛星写真からの比較写真です（図 14）。閖上地区、市街地の屋根が殆ど見えなくなりました。また、仙台市の海岸線の地形が明らかに変わっております。

これが、閖上地区の震災前と震災後の拡大写真です（図 15）。煙が見える地区が、先程の閖上 7 丁目の大火災であります。

これまでの津波の歴史を振り返ってみますと、明治三陸大津波からは近年の記録として、はっきりと残っていますが、今回の津波は、約 1100 年前の貞観大津波の周期的なものだということは、殆どの人が、この知識を持ち合わせていませんでした。

これまでの津波の教訓。沿岸部だから、とりあえず、大地震・津波警報が出たら高台に逃げろ。３月９日、本震の２日前に比較的大きな地震が発生。名取市で震度 4 。石巻市鮎川で 50cm の津波を観測。消防団は広報活動実施。被害なし。心の中では、金華山リアス式海岸の最南部より南では、津波被害がないと思っていた。遠浅の海岸では、津波被害がないと思っていた。すべて、甘い考えでありました。

図 16

図 17

図 18

図 19

図 20

従って、近年の歴史から伝わった意識だけでは、まさか津波が砂浜の防波堤を乗り越え、街まで呑み込むとは誰が想像したでしょうか。本当に、甘い考えでありました。

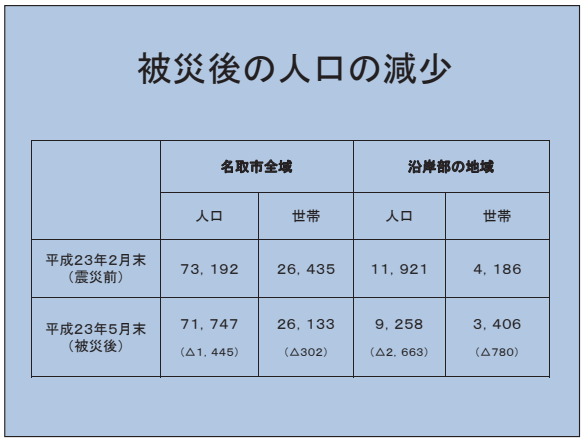
津波が引いて、数日後の航空写真です（図 16）。漁港前の写真からは、木造家屋の基礎部分しか残っていません。閖上中学校は避難場所となり、校庭には流れ着いた漁船、車、瓦礫の山が体育館前の所で、せき止められております。

宮大工が丹精込めて作った東禅寺は、さすがの巨大津波でも壊すことはできませんでした（図 17）。しかし、中は全壊状態です。河口から閖上の街を見渡すと、戦時中の空襲後の写真のようです。

３棟ある黄色い建物の介護施設では、34 名の方々が亡くなりました（図 18）。周辺の大きな水溜まりは、海水が引かず、水浸しになった田畑の状態です。右側の写真は、家屋の密集で、津波の勢いが弱くなり、流失を免れた閖上 1 丁目地区です（図 19）。この周辺からたくさんの遺体が収容されております。

閖上の漁協は、建物がしっかりと残ってはいますが、内部の設備はすべて流失いたしました。水揚げ場所の路面も、ひどく陥没しています。監視塔の下にはトタンのような瓦礫が引っかかっていました。津波に乗って陸上を動き回った 4.9 トンの漁船。ど

図 20



	名取市全域		沿岸部の地域	
	人口	世帯	人口	世帯
平成23年2月末（震災前）	73, 192	26, 435	11, 921	4, 186
平成23年5月末（被災後）	71, 747 (△1, 445)	26, 133 (△302)	9, 258 (△2, 663)	3, 406 (△780)

図 21

図 22

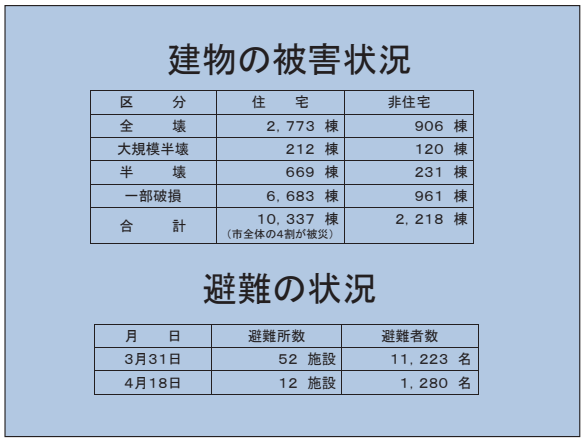


図 23

この被災地でも、よく見かける光景でもあります。

防砂林として植えられた松の木が津波によりなぎ倒され、流木となって家や畑を荒らしました。

右側の写真は、一刻も早く救援物資を我々に届けてくれるために、昼夜を問わず整備した 3000m 滑走路、３月 16 日に、アラスカからの米軍輸送機が初めて降りたっております（図 20）。世界中から輸送機が離着陸し、まさに東北一の国際空港の機能を果たしました。民間旅客機が運行をはじめたのは、４月 13 日で、震災から１ヶ月以上経過してからです。周辺の流失車両の仮置き場となった空港駐車場、鉄道の駅にはアメリカ軍が駐屯しております。

空港南側の北釜集落は、北釜メロンという一大ブランド品を産出していた臨空の町です。塩分を含んでしまった畑では、当面、作物は育てられないと聞いております。右側が、その住民の広報活動に回った小型動力ポンプ積載車も一瞬にして流されました（図 21）。

ご覧のように、被災前の名取市は、閖上地区の一部や下増田地区の新興団地開発にともない、市全体の人口は着実に増えております（図 22）。ところが、今回の震災で、閖上・下増田の住民が死亡、または転出により、世帯の減少が著しく目立つようになってきております（図 23）。

７月４日現在の死者・行方不明者の数はご覧のとおりです。今現在も、最後の１人まで必ず見つける信念を抱き、自主的な捜索活動を続けておりますが、最近ではなかなか発見にいたっておりません。死者・行方不明者合わせて 1012 名になっております。

建物については、市の約４割が被災しました（図 24）。住宅の全壊と大規模半壊を合わせた数でいえば、市全体の約１割に相当する規模になります。避難状況では、ピーク時でおおよそ人口の 15％が避難しました。現在では避難所のすべては閉鎖され、家を失った人々も新しい住居で新しい生活を始めております。

名取市の消防団の紹介です。組織は１本部６分団で定員は 480 名です。幸いにも名取市消防団におい

地震直後の私の行動

図 25

ては成り手不足の不安はなく、常に 460 名前後の団員を維持しております。震災前の 3 月 1 日当時は 473 名充足率 98%です。

震災での犠牲者、殉職消防団員 15 名、閖上分団 11 名、下増田分団 3 名、増田分団 1 名。公務外での死亡団員 5 名。殉職消防職員 3 名、名取市消防署閖上出張所当日勤務職員です。消防団の被災施設、被災車庫・詰所 6 棟、被災車両 7 台。我々の仲間の犠牲者です。誠に残念な結果です。しかしながら、消防活動中に、父・母・妻・子供が災害に遭い、亡くした団員が多くいることも忘れてはならない事実です。

地震直後の私の行動、3 月 11 日当日、地元・閖上中学校の卒業式に招かれ、帰宅後、いつもより遅い昼食を終え、妻と卒業式の様子などを語り合っていた 14 時 46 分、これまで、体験したことのない激震（図 25）。いつ止むともなく長い揺れで、5 分くらい続いたでしょうか。地面から揺さぶられるような余震が次々起こる中、店の中は商品がひっくり返り、揺れが一時収まったところで外に出て見ると、店舗 2 階の壁が道路を覆っていたので、車の通行の邪魔にならないようにと撤去し、続いて新中学 1 年生の制服が沢山入荷していることもあり、浸水により汚してはならないと思い 2 階に運び込み、ホッとする間もなく妻に急いで避難するようにと促しました。妻は車で、自分もすぐ消防の活動着に着替え、約 500m 離れた公民館に向かいました。この日、32 回目の結婚記念日を迎えた妻との別れとなってしまったのです。

私は途中、まだ避難してない方々に津波が来るから早く避難するようにと呼びかけをしながら、持ち場である公民館に急ぎました。途中、仲間の団員も近所の老人世帯に声かけをしていました。その団員は、消防団としての任務遂行し、自分のガソリンスタンドの戸締まりに戻って被災し、残念な結果となりました。私は公民館にあとわずかというところで、東側に黒煙が見え、地震により火災が発生したのではと思い「火事だー」と騒いだ瞬間、お寺の墓石が津波によりなぎ倒される音、バキ、バキ、バギーっと黒い津波。5～6 m くらいはあったか。見た瞬間、夢中で大声で「津波だー！逃げろ」と叫び公民館に

図 26

図 28

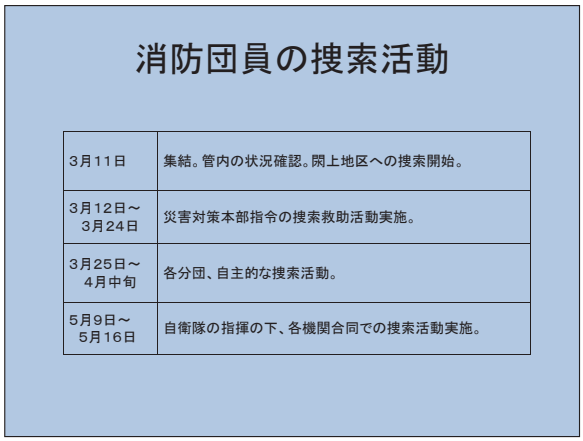


図 27

図 29

滑り込みました。

危機一髪で公民館に滑り込みましたが、私の後ろを走ってきた人たちは一瞬にして津波に呑まれ、どうすることもできませんでした。

公民館の自動ドアを閉めた後は、１ｍくらいの高さまで押し寄せていました。そして、開閉式のドアを閉め、階段を５～６段昇った所で、津波が胸付近まで来ました。玄関で５人の人たちの姿も確認しましたが、一瞬のうち、津波に飲み込まれてしまいました。手の施しようがありませんでした。階段で、私の前にお婆ちゃんが津波に足をすくわれ歩けなくなっていたのを後ろから支え、渦巻く津波に私も足をすくわれながら、やっと２階まで上がったら津波も追いかけるように２階の廊下まできました。これ以上、水が上がったら大変なので、避難している人たちにテーブルを寄せ上にあがるように指示しました。窓の外を見ると柱にすがり、「助けて」と公民館を見て叫んでいる若者もいて、公民館のマイクコードを繋ぎ、救出を試みたわけですが、渦巻いた津波は遠く遠くへと引き離し無力にも何もできませんでした。多数の犠牲者が出て、まるで地獄絵図そのものでした。閖上中学校・閖上小学校が避難所になっていて、海岸から 1.2km から 1.8km くらいあります。１階は 1.5m ～２ｍの水没です。津波の遡上は海岸より４km。その中に津波を阻止した仙台東部道路の法面があります。

この鉄筋コンクリート２階建ての閖上公民館は、避難所指定にはなっているものの、当時の 10m の大津波に対応できるかどうか、危ぶまれていました。しかしながら、小学校･中学校までたどり着けなかった 78 名の住民が身を寄せた場所です（図 26）。ここまでもたどり着けなかった人が大勢おります。

消防団の捜索活動はこのようなものでした（図 27）。招集命令により､団長指揮の下で活動したのは、延べ日数 22 日間。延べ人員 1378 名でした。

内容といたしましては、震災翌日から常備消防と災害対策本部指令で救助活動、併せて遺体捜索活動をはじめました。初めは足場が悪く、泥だらけの捜

図 30

図 31

図 32

索活動でした。私も、見覚えのある横転している車より知人を発見しております。

道路確保ができてから本格的な捜索がはじまりました。15 日より、各隊 4 名以上、10 隊編成で組織し、常備とともに活動いたしました。

5 月になってから、自衛隊・警察・常備消防・消防団で、被災地を 202 のメッシュで区切り、自衛隊の指揮の下、徹底した遺体捜索を開始いたしました。

私の担当したのは用水堀の捜索活動。自衛隊より胴長靴を借用し、堀の幅により人員を振り分け、横一列 1 m 間隔で前進する過酷な作業でした。一番深い場所は、自衛隊の人が泳ぎながらの捜索で、頭が

下がる感謝の気持ちでした。それ以外でも、沿岸部の分団員は、家族・知人の捜索のため、自主的な活動を続けています。

捜索活動、８時30分、公民館へ集結（図28）。団長から今日の現場と活動内容が指示されます。活動中の事故、怪我が心配でしたが、幸いにも公務災害の発生はありませんでした。このような瓦礫の中での捜索活動は、ぬかるみで足場が悪く、釘やガラスがいたるところにあり困難を極めました。捜索活動を進めるにあたり、晴れた日には特に瓦礫からの粉塵がひどかったのでゴーグルを使用しました。ぬかるみが多く、編上靴だけでは泥だらけになるために、胴長靴も必要な資機材だと思います。

犠牲者が発見されたときは、警察官や自衛隊の鑑識に引き継ぐこととされております。左側の写真のように、容易に分かるように旗印を立て目印といたしました（図29）。

ハウスの中などは、重機が入れないので、手作業でバケツリレーの要領にて瓦礫を排除し捜索をいたしました。このような地道な捜索で、３遺体が発見されております。

津波襲来時刻には、車に乗って逃げる人の交通渋滞が多発いたしました。津波は渋滞中の車を瓦礫ごと呑み込み、乗っていた人たちはシートベルトを締めたままの状態で帰らぬ人となっていました（図30）。

津波が引いた後の田や畑は排水が悪く、１ヶ月近く泥沼の状態でした。重機も入れず、ここを捜索するには腰まで浸かって歩かなければならなかったのです。

こちらが、大規模半壊と言われる住宅です（図31）。家の形は保たれていますが、玄関は流れ込んだ瓦礫が埋め尽くし、部屋の奥で犠牲者が発見されることもしばしばありました。

ポンプ小屋の外壁に津波の痕跡が残っております。おおよそ180cmの位置でした。

被災消防車両。下増田５部の車両では、広報中の団員が３名､車両に乗ったまま犠牲になりました（図32）。分隊長は放送マイクを握ったままでの状態で発見されました。閖上９部の最新型の車両は、自力避難ができない人を閖上小学校まで搬送し、校舎に担ぎ込んだ瞬間に津波が来て押し流されました。

今回の震災においては携帯電話が使えず、情報を把握することが困難でした。消防車両に取り付けられてある受令機では、一方的な指示及び状況だけを聞くだけで、受け答えができない状態です。消防団用の送受信できる通信機材が必要かと考えます。各分団車両に指示も出せるし、リアルタイムで現場状況も把握することができます。また、消防本部に指示を求めることや、現場の状況を報告することもできると思うからです。

図33

図34

名取市の復旧に向けて、まだまだ犠牲者の思いが断ち切れたわけではありませんが、名取市は復興しなければなりません。この写真は、いち早く町を活性化すべく、場所を移したにせよ、閖上の朝市が復活しました（図34）。６月には仮設住宅がおおむね完成し、いつもの生活を取り戻しつつあります。名取市では、９月を目標に復興計画を作っております。

終わりになりますが、今回の震災により、全国各地、さらには世界中から温かいご支援をいただき、大変感謝いたしております。惜しくも犠牲になりました消防団員に敬意を表し、これから名取市が復興することを誓い、この震災で得た教訓を風化することなく、後世に伝えることも我々の使命かと、力強く生きてゆきたいと思っております。

ご静聴、誠にありがとうございました。